



チュートリアル課題 うちの子、大丈夫?

著者名	東京女子医科大学
雑誌名	チュートリアル課題
巻	2016
号	S7
発行年	2016-04-28
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032703

2016年度 Segment. 7

課 題 No.4

課題名：うちの子、大丈夫？

課題作成者：小児科学

平澤 恭子



無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。

シート1

河田花子さんのお子さん、太郎君は明日でちょうど9ヶ月になります。
花子さんから医学生であるあなたへ 次のような相談がありました。

「隣の家のお子さんは私の子と誕生日は1週間しか違わないのに、もう寝返りもどンドンするし、お座りで遊んだりしているの。つかまりだちももうできて、テーブルのものをさわったりしているの、すごいよね。それに比べるとうちの子は寝返りも、おすわりも全然できないの。少し早く生まれているからなのかな？ 出産予定日からすると今7ヶ月半くらいなんだけどね。うちの子の発達は大丈夫かとても心配しているのだけれど、どうかしら？」

シート2

あなたは、早産児は一般に特に乳児期には予定日からの月齢で発達を評価すること、発達のリスクは高いことなどを思い出し、「9ヶ月のこどもができることがまだできなくても大丈夫なんだけど、早産児では発達はしっかりみておいてもらったほうがよいと思う。7ヶ月としてどうなのかを評価をしてもらうために健診を受けたほうがよい。」とアドバイスをしました。

花子さんは早速、出産後太郎くんが入院していた病院の発達外来で7ヶ月健診をうけにいきました。

そこで、太郎君が、寝返りやお座りがまだできないことなどを話したら、いくつかの発達についての質問や診察を受けました。特にお座りやねがえりができず、すこし四肢が固いのではないかといわれ、精密検査をうけるように大学病院の発達外来への紹介状をわたされました。

シート3

そこで紹介された大学病院を受診しました。

外来では生まれた時のことなどを質問されたので、次のようなことを説明しました。

「予定日より約2ヶ月はやい30週4日で体重は1626gで生まれました。
アプガースコア は7／8点 でしたが、その後呼吸状態が悪化し、新生児呼吸窮迫症候群と診断され、薬剤投与と数日間人工呼吸器を使用し、その後酸素を比較的長く使ったと聞きました。 その間血圧が変動することや、無呼吸があったことなどを主治医の先生から説明をうけたのを覚えています。

退院したばかりの頃は、早産で低出生体重児なので将来ちゃんと育つのかなと心配しましたが、ミルクもきちんと飲むし、順調に体重も増えているので少しずつ安心していました。

首のすわりは6ヶ月で、少し遅いかなと思い、担当の先生に質問しましたが、太郎君の6ヶ月は、修正月齢では4ヶ月ということになるので、心配ないと言われました。 その後は私も少しずつ育児にもなれていったため、あまり心配せず、健診のための外来受診もうけずに今まで過ごしていました。
でも、9ヶ月を過ぎても寝返りやお座りができないので、うちの子本当に大丈夫かなと思って、医学生の友人に相談したところ、早産の子どもはちゃんと健診うけたほうがよいと勧められました。
新生児期に入院していた病院を先日受診したら、この病院を紹介されました。」

また、健診を受けた病院からの診療情報提供書も先生に渡しました。

シート4

初診のときの太郎君の発達についての診察状況は以下の通りでした。

赤ちゃんの前に差し出されたおもちゃに右手や左手を伸ばしてつかもうとします。何回か手を出してようやく、つかむことができました。片方の手で持ったものを反対側の手で持ちかえるなどはできませんでした。両手に小さなおもちゃをもってあそぶことも殆どしませんでした。また人見知りが始まっており、診察を始めようとして目があうと大泣きをします。布かけ試験（ハンカチテスト）は少し時間はかかりましたが、右手でも左手でも手をもっていき布をとることができました。

7ヶ月児ではよく観察される下肢を持ち上げて口に入れたり、手で持ったりする仕草はあまり観察できず足を突っ張らせていることが多く、また下肢のPTR、ATR が亢進している様子やankle clonusが観察されました。また医師が太郎君を座らせようとしても足を固く突っ張って、体をのけぞらせてしまうために座位を取ることはできませんでした。縦垂直懸垂位をしたときも足を固くつっぱらせてしまっています。

医師は脳性まひの可能性があることを告げ、脳のMRIが必要なことをお母さんに説明しました。

シート5

太郎君は修正7ヶ月の時点で始めてMRIを撮影しました。MRIの結果 脳室周囲白質軟化症の所見が認められ、これは脳性まひの原因となりうることや、太郎君の今の状況が両下肢をつっぱりやすく、筋緊張が高いことなどを認めることを考え合わせると、脳性麻痺であり、そのタイプとして痙性両麻痺であると診断されました。

担当医から今後の経過、またリハビリテーション治療が必要なこと、さらには外科治療なども現在は行われていることなどがご両親に伝えられました。ご両親は歩けるのかな？と心配になりました。担当医は両麻痺の場合は程度も色々ですが、歩けるようになることもまれではないことなどをお話しし、そのためにリハビリなどの治療を続けていくこと、特殊な靴などの調整も今後必要になることなどを伝えました。ご両親は漠然と治療費などについても心配になりました。

福祉制度などについても質問すると、医療ソーシャルワーカーなどとの面談の約束もとつけてくれました。

まずはリハビリテーションによる治療が始められました。

シート6

太郎君はリハビリや選択的脊髄後根遮断術という外科的手術なども行いながら徐々に発達し、6歳になりました。杖をついて歩けるようにもなりました。

もうすぐ小学生です。

お母様は太郎君がしたいことは何でもチャレンジさせたいと思って前向きに生活しています。